

思

考

の

隔

景

妖怪の歴史にあって、安永5（1776）年は画期的な年らしい。それまでははっきりとした姿を人々に晒すことを好まなかった妖怪が、大量の映像として人々に棲み付き始めたからだ。この年には鳥山石燕の『画図百鬼夜行』、平賀源内の『天狗髑髏鑿定縁起』、上田秋成の『雨月物語』さらには恋川春町の『其返報怪談』が、堰を切ったように一度に出現する。それまで民間伝承のなかでその名は語られてはきたものの、どのような姿かたちをしたものか漠としていた化物たち。あるいは肉筆の絵巻にとぐろを巻いていた異形たちが、この頃一挙に版本の世界に解き放たれ、複製媒体により文字通り版で押されて視覚的に流通し、虚構の世界という独自の表象空間を住处として増殖を開始する。それまでの妖怪が、超自然現象を説明するための便法としての「名」的な存在として土地に縛られていたなら、これ以降、妖怪たちは、土地の束縛を解かれ、娯楽に供されるキャラクターとして、出版文化に欠かせない登場人物ならぬ登場怪物の地位を獲得する。

室町時代中期（16世紀）には成立し、土佐光信に帰せられる『百鬼夜行絵巻』と、鳥山石燕の『図画』とは、どこが異なるのか。前者が怪物の行列を描くのに対して、後者では一つ一つの妖怪には名称が記載され、個々の絵に閉じ込めら

連載⁹⁰
妖怪の変容
江戸から明治の心性はいかに表象されたか

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授
稲賀繁美

れている。妖怪たちは、百科事典よろしく博物学図譜の体裁に整序されている。操作可能な画像となった妖怪たちは、ほどなくパロディの道具とされる。石燕の弟子の歌麿には『画本虫撰』（1788）が知られ、石燕が跋を寄せているが、昆虫図譜の体裁のこの刊行物は、天明狂歌連の作品を掲載する摺物だった。その狂歌連仲間には山東京傳もいたが、彼の『化物和本草』（1798）は貝原益軒の『大和本草』をもじっての妖怪目録。石燕と京傳を繋ぐのが、森羅万象の『画本纂怪興』（1791）というパロディ妖怪図鑑の魁。万象とは蘭学者の森島中良の戯作者としての名で、幕府奥医者、桂川甫三の息子だった彼も平賀源内の弟子だった。

こうして妖怪娯楽ともいえる遊戯は、玩具や双六、からくりなどにも飛び火して変奏を遂げるが、それはどうやら明治中期に、もう一度様変わりを見せるようだ。月岡芳年の『新形三十六怪撰』（1889-92）を見よう。足利尊氏の家臣大森彦七は美女を背負って川を渡るが、水面には角が映る。美女は楠正成の怨霊が変じた鬼女だった。また福原に遷都した平清盛は、襖の対の取手に髑髏の眼窩を見る。ここに描かれたのは、清盛の追害妄想、強迫観念といってよい。芳年は、妖怪を描くかわりに、妖怪を見る人間の心理に憑かれていた。江戸後期に、多くの

怪異現象は、蘭学流行にも誘われ、視覚装置による演出の材料となり、表象の対象となった。ところが明治中期になると、怪異は心的現象として再解釈され、生き身の人間の不可視の脳内へと封印されてゆく。世は「神経」の時代を迎え、妖怪現象も神経病と診断される時勢となっていた。思えば芳年その人も「神経」を病んで果て（1892）、高座で怪談に長けた三遊亭円生夫妻も、『累ヶ淵』を地でゆく奇怪な「神経症」で没し（1881）、その師匠の円朝も、十九世紀最後の年に「脳病」で世を去っている（1900）。その後、二十世紀の妖怪の変貌振りは、またの機会に。

*香川雅信『江戸の妖怪革命』（河出書房新社、2005）。同書は必要な研究史の概観を付して、総合研究大学院大学・文化科学研究科・国際日本研究専攻の論文博士号を九月に取得した。なお、専攻の基盤機関たる国際日本文化研究センターには「怪異・妖怪伝承データベース」（<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/yokai.html>）が開かれている。先日、目下の勤務先のワシントン議会図書館からaccessしたが、alphabet入力では、登場するのは「文字化け」という名の妖怪ばかり。日本語ソフトは、会いたい妖怪に会う必需の鍵なのだろうか。